明星大学 人文学部人間社会学科 ニュースレター

JIN-SHA YELL

ジンシャエール
2021.Nov.
Vol. 28

人間社会学科、略して「ジンシャ」。ジンシャに関わるすべての人にエール（声援）を送ります！

コロナ禍の学科活動について学生が熊本先生にインタビューしました

コロナウイルスの感染防止のため、オンライン授業への対応を余儀なくされてから１年半ほどの時間が経ちました。最初は学生も教職員も、まさに手探りで対応したオンライン授業でしたが、今ではかなり慣れてきており、オンラインのメリットも感じられるようになりました。

では、具体的にどのような対応がなされていたのでしょうか。学生が学科主任の熊本先生に聞いてみました。

Q オンライン授業だけだと、他の学生の様子がわかりにくくて、モチベーションの維持が難しかったのですが、どのような工夫をしていたのですか？

A このことは私たちも気にしていました。ZOOMのブレイクアウトセッション機能をつかって少人数でのディスカッションしてもらったり、リアクションペーパーに書かれていた講義の感想や質問を次回の講義で紹介したりすることで、なるべく対面講義に近い環境を実現できるよう心がけていました。

Q 成績評価がほとんどレポートになってしまったので、期末の学習時間の確保が大変でした。試験を増やすことはできますか？

A オンラインで試験を行うのは、ネットのトラブルなどを考えると難しいです。ただ、レポートが重なってきついという声は聞こえていましたので、成績評価の方法を分割するように工夫しました。例えば明星LMSの小テスト機能をつかって、授業の内容を振り返る問題をだし、その点数を成績評価の一部にする、といったことです。学生からも復習になってよかったと好評でした。

明星LMS

Q 今年度から一部のゼミが対面になりましたが、高齢の祖父母と同居しているので電車に乗るのが不安です。

A みなさんやご家族の健康を守ることは大前提です。そのため、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド授業を行うことで、自宅からでもゼミに参加できるよう設備を整えました。

学生からの質問に答える

＼ 熊本主任より ／

オンラインへの対応は、これまでやってきた授業の内容や進め方を見直す貴重な機会でもありました。そして学生たちも、計画的な学習のためにスケジュール管理を行うようになるなどの成長をみせてくれました。これからも授業の質を落とすことなく、教員一同、充実した教育を進めていきます。

ハイブリッド形式のゼミの様子

GREEN PRINTING JPPI
P-D10010

鵜沢ゼミ

夢に向かって挑戦した コロナ禍二度目の夏休み

4年　山本 祐介

私はeスポーツにチャレンジしています。eスポーツとは「Electronic Sport」（エレクトロニック・スポーツ）の略称で、簡単に言うと電子機器のゲームを使って対戦する競技のことです。私はその中でも格闘ゲームであるSTREET FIGHTER Vというゲームを好んでやっており、将来ゲーム一本で生活できるようなプロゲーマーを目指しています。

この夏休み中、私はステップアップのためにチームに所属することを目指しました。その結果、私はアマチュアチームであるFoxGamingに所属することに成功しました。チームでの活動は練習だけでなく、悩みや将来について話すこともあります。相談に乗ってもらえて救われたこともあり、チームに少しでも貢献したいという気持ちが通じたのか、所属して間もなくSTREET FIGHTER LEAGUE:PRO-JP 2021 U22 LIMITEDという22歳以下限定の大きい大会で優勝することができ、優勝した報酬として遂にプロライセンスを取得できました。プロライセンスを取得することで、ライセンス保有者限定の大会に出場できるメリット等があるのですが、ゲーム一本ではまだ生活ができない自分としては大きな声でプロとは言えません。これからは大会出場やチームの活動のほか、顔出し配信や動画編集に力を入れていきたいと思います。

優勝トロフィとのツーショット

チームロゴとチームスポンサーロゴ

鵜沢ゼミ

ワークライフバランスの取れた 企業・団体@日野市をインタビュー調査

鵜沢ゼミでは、毎年2・3年ゼミ合同でフィールドワークを行ってきましたが、今年度は、日野市役所と実践女子大学・須賀先生のゼミと協働でワークライフバランスの調査を行っています。具体的には、明星大学が位置する日野市の企業・団体で、ワークライフバランスに取り組む先進的な事例として、今年度はコニカミノルタ・日野市役所（鵜沢ゼミ担当）、日野自動車（須賀ゼミ担当）にインタビュー調査を行います。その結果は2022年2月の「広報ひの」および日野市役所のHPに掲載される予定です。対象の企業・団体は学生たちで調べたうえ選定し、中心となる3年生が対象の企業・団体の概要を合同ゼミで報告、インタビュー内容を精査して準備を進めてきました。2022年夏には、学生が司会進行をする「高大生のためのオンライン見学会」を上記の企業・団体で実施する予定です。感染予防に配慮しつつ、かつオンライン会議システムのZOOMを存分に活用し、学生たちの世界が広げられるように地元に根差したゼミ活動を行っています。（鵜沢）

3年生が調査対象の自治体や
企業について説明

合同ゼミで、3年生の発表者も
オンライン参加

竹峰ゼミ

学生相互で議論し刺激しあう ゲストを招き、ニューヨークともつないで

２年生の竹峰ゼミは、毎週担当の学生が、ゼミ生と分かち合いテーマを選び、司会進行役を務めます。調べてきたことを基に、他のゼミ生の考えや疑問を引き出し、議論をしながら展開します。ミャンマー軍事クーデター、地球環境問題、現代の戦争、子どもの貧困、LGBTQ、ファッションにみるジェンダーフリーなど多彩なテーマが持ち込まれます。ヴィーガンの当事者を交えて議論したこともありました。

６月には、オンラインでニューヨークとつないで、上級生との合同ゼミを実施しました。お迎えした竹内道さんは、ニューヨークを拠点にビジネスの世界で活躍する傍ら、映画『ヒロシマへの誓い　サーロー節子とともに』を制作するなど、映像を活かした社会活動にも着手している方です。竹内さんが制作した映画の感想を出発点に、竹内さんから日本社会を眺めて、「話すときなぜ、語尾を弱めるのか、断定しないのか」との問いをめぐり議論を交わしました。時差の関係で夜９時半開始でしたが、竹内さんの話や映画に背中を押され、終了後も夜中まで学生相互で語り合っていたようです。

７月には、日野市の平和と人権課の職員さんも参加し、学年横断の交流ゼミを実施しました。日野市平和活動推進補助金を受けることになったゼミの３年、４年生の表彰式も実施しました。後期の２年ゼミは、毎週担当の学生が、ゲストを呼んできて、議論をしながら展開します。どんなゲストと出会えるのか楽しみにしています。（竹峰）

ニューヨークとつないで実施した
オンライン合同ゼミ

学年横断の交流ゼミ
グループワーク中

日野市平和活動推進補助金の贈呈式

熊本ゼミ

「都民提案」の投票対象事業に選ばれました！

熊本ゼミでは、「都民が提案し、都民が選ぶ」事業提案制度である「都民提案」に取り組みました。いま都民が抱えている問題は何か、問題解決のためにどんな事業が必要か、事業を行うことでどんな効果が得られるのか、ゼミ生どうしで議論を重ね、２年ゼミ、３年ゼミから２つずつ、計４つの提案を行いました。

そしてなんと、２つの提案が投票対象事業に選ばれたのです！応募された477件のうち、選ばれたのは13事業だけ。そのうちの２つが熊本ゼミの提案でした。これは快挙です！

選ばれた提案は、「若年層の防災意識向上に向けたYouTuberとのコラボレーション動画配信」（２年ゼミ）と「子育て相談のチャットボット導入によるサービス向上」（３年ゼミ）です。学生らしい、インターネットやITを活用した提案が審査員の目にとまったのだと思います。

コロナ禍で実施できなくなったフィールドワークの代わりにやってみた取り組みでしたが、活発な議論、主張の根拠となるデータの収集、そして意見の集約といった活動を通して、学生も大きく成長しました。

果たして２つの提案が実際に東京都の政策として採用されるのか？発表は11月中旬です。乞うご期待！（熊本）

２年ゼミ提案事業

３年ゼミ提案事業

新任教員の紹介

荒井（あらい） 悠介（ゆうすけ）

東京都立川市出身、一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。
専門は教育社会学、文化社会学、若者文化研究。

単著書・共著書

挨 拶

今年度９月より着任しました。

「若者の社会化」を大きなテーマとして、若者はどのようなものを社会において必要なものとして捉えながら大人になっていくのか、ということを研究しています。

研究の方法としては、参与観察やインタビューといった質的な方法を中心に、学校や若者文化の調査を行っています。

講義では主に、教育社会学の分野と質的な調査科目を担当し、学生のみなさんと一緒にインタビューやフィールドワークを行います。

学校や若者文化という身近な存在を捉えなおすことは、どのような社会で生きているのか、どのように生きることが幸せなのか、それを自分自身で考える力に結び付きます。

そして、人と接する調査やディスカッションは、視野を拓き、社会的知性を得ることに加え、おもいやりを持って人と接するという、とても大切なことを学ばせてくれます。

みなさんと一緒に学べることを、心から楽しみにしています。よろしくお願いします。

2020年度 卒業生へのアンケート集計結果

2020年度、新型コロナで苦難の一年の中、卒業を迎えた学生たちは、本学科での学び、そして教員たちの指導・教育について、どのように感じていたでしょうか。

図１参照

学科に設置されている専門科目については「やや満足」「とても満足」と答えた学生を足し合わせると、実に八割が満足していることがわかります。

図２参照

教職員による学生サポートに対して「やや満足」「満足」と答えた学生を足し合わせると、卒業生の約3/4が満足していました。

図３参照

「本学科を卒業したことに満足しているか」については、「やや当てはまる」「非常に当てはまる」と答えた学生を合わせると、卒業生の八割以上が、満足していることがわかりました。

学生たちが、自ら力を発揮しながら、人生をエンジョイしていけるように、教員一同、これからも力を尽くしてまいります。ご理解とご助力のほど、よろしくお願い申し上げます。（天野）

図１
専門科目の授業内容

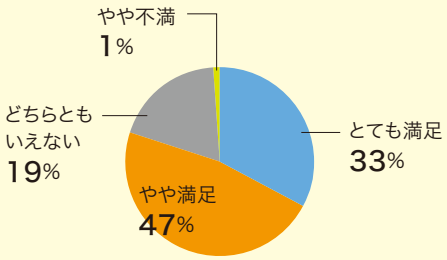


図２
教職員による学生サポート

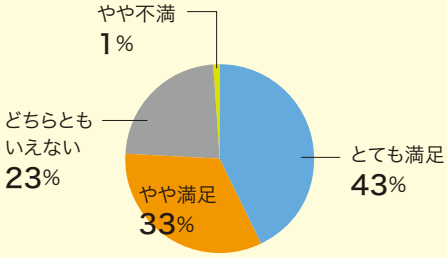
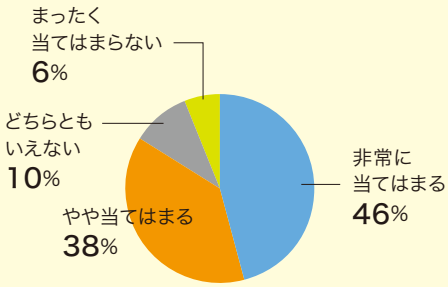


図３
本学科を卒業したことに満足している



日本家族社会学会賞（第２回奨励著書賞）受賞について

このたびは、2018年に晃洋書房から出版した拙著『家族情緒の歴史社会学―「家」と「近代家族」のはざまを読む』が、日本家族社会学会賞（第２回奨励著書賞）を受賞しました。

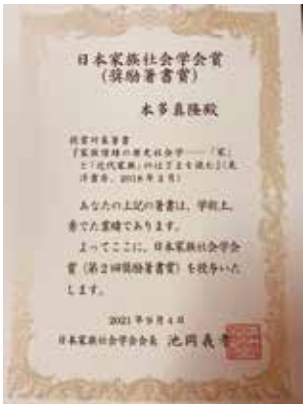
日本家族社会学会は、「家族に関する理論的・実証的および実践的な研究を推進し、個人と社会の発展に寄与することを目的」に、1991年に結成された学術団体です。多くの家族社会学者は、この学会に所属しています。本書は、投稿論文、博士論文をベースに執筆したものであり、こうした専門学会の賞をいただけたことは、自分、そして本書にとって非常に有難いことだと思っています。

本書は、これまで「近代家族」の特性とされてきた家族の情緒的関係が、日本の伝統的家族である「家」と関連づけられていた局面に着目し、戦前から戦後初期までの「家族」言説について、「公」と「私」の問題を中心に考察したものです。

現在では「家族」や人びとの情緒的関係は、私的な世界の代表格として扱われています。しかし戦前期の日本（大日本帝国）では、公私が未分離であり、「家族」やその情緒的関係について語ることは、公的な社会的連帯を語ることと結びついていました。取り上げた主な資料は、過去の家族研究の学説のほか、法制度上の「家（家族制度）」に関する議論、国体論、教育勅語、廃娼・存娼論、そして戦後初期の民主化論など多岐にわたっていますが、とりわけ公的世界に関わるテキストで論じられていた私的なものの言説を中心的に扱ったのが、本書の特徴だと思っています。「近代家族」の枠がゆらぎ、公私の再編が問われている現在、あらためて日本における「公」と「私」の文脈を問い直そうとしたのが、本書の裏の主題のひとつです。

現在は戦後日本を射程に入れ、子育てなどの私的なものをどのように公的なものに接続させる取り組みが行われていたのか、あるいは近現代日本の私的なもの（セクシュアリティなど）の特徴はどのように位置づけられるのかというように、本書のテーマの発展にも取り組んでいます。

研究を通して、人間社会学科の教育にも還元できるようより一層努力していきたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。（本多）



熊本教授の著書が「藤田賞」を受賞！

喜びの言葉

2021年に勁草書房から出版した『交差する辺野古―問いなおされる自治』が、地方自治、地方財政および都市問題に関する研究を奨励するための賞である「藤田賞」（主催：後藤・安田記念東京都市研究所）を受賞いたしました。お世話になったみなさまに、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

本書は、私が大学院生の頃から20年以上続けている、沖縄県名護市辺野古でのフィールドワークを元に書かれたものです。普天間基地の移設先として有名な辺野古は、その普天間基地の代わりに建設される新たな基地の受け入れを、条件つきで容認しています。その理由を、沖縄がまだアメリカの施政権下にあった頃に辺野古につくられた米軍基地「キャンプ・シュワブ」と歩んできた歴史や、建設に反対している市民運動との関係性、そして政府や沖縄県の政策とも結びつけながら、描きだしていきました。

辺野古への移設を実現するために、政府は様々な「アメ」を沖縄に提示しています。そして「アメ」は、沖縄の政治と社会を翻弄していきました。特に第二次安倍政権以降は、辺野古移設に協力する自治体には交付金を交付し、そうでない自治体には交付しないという、あからさまな「アメとムチ」政策が取られるようになりました。このような政策は地方自治の危機をもたらすものである、という本書の主張が評価されたのだと思っています。

コロナウイルスの感染が広まる前までは、希望する学生を募って、沖縄での研修を実施していましたが、そのときは必ず辺野古集落を訪問し、移設を肯定する人と否定する人、双方の住民の方から話を聞く機会を設けていました。この問題の複雑さを実感するとともに、辺野古で普通に暮らしている人たちの思いに触れた学生たちは、今まで見えていたものの裏にあることへの想像力を働かせることができるようになります。コロナが終息したら、また研修を企画しますので、関心がある学生はぜひ参加してください。

辺野古の住民から話をきく

第四十回藤田賞
熊本博之様